

”Correspondance André Gide – Jacques Copeau”

吉井, 亮雄
北海道大学言語文化部助教授

<https://hdl.handle.net/2324/19388>

出版情報：仏文研究. (19), pp.160-164, 1988-09-01. 京都大学フランス語学フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



Correspondance André Gide — Jacques Copeau
Édition établie et annotée par Jean Claude.
Introduction de Claude Sicard.

(Tome I [707 pp.], Gallimard, *Cahiers André Gide* 12, 1987)

吉 井 亮 雄

『新フランス評論』の精神的な支柱であり続けたアンドレ・ジッドが、同誌の共同創刊者五人と多年にわたって交したそれぞれ大部な書簡集のうち、1976年に公刊されたアンリ・ゲオンとのそれに続いて、待望久しかったジャック・コポーとの往復書簡集第一巻が「カイエ・アンドレ・ジッド」第十二巻として出版された(後半部をなす第二巻は1988年内に出版予定)。長い紹介的序文を寄せたトゥールーズ大学教授クロード・シカールは、マルタン・デュ・ガールやコポーの専門家として著名で、両者の往復書簡集の出版、マルタン・デュ・ガール総合書簡集編纂への参加などに続き、現在、コポーの日記の出版を準備中である。一方、校訂と附註を担当したジッド研究者、ナンシー第二大学助教授ジャン・クロードは、その重要性が指摘されてきたにもかかわらず、実質的な研究が伴われたとは言い難いテーマ「ジッドと演劇」を国家博士論文の題目に選んでおり、当然そこではヴィユー・コロンビエ座を中心とするコポーの演劇活動との関わりが大きな比重を占めるに相違ない。このような意味において、当往復書簡集は最も適任の研究者二人を刊行者として得たと言えよう。これに続いて、ヴィクトル・マルタン＝シュメッツとクロード・マルタンの校訂によるアンドレ・リュイテルスとの書簡集がリヨン大学出版から近刊予定であり、残るマルセル・ドルワンおよびジャン・シュランベルジェとの書簡集も、ガリマル出版社の依頼のもとに、ミッシェル・ドルワンと、故オーギュスト・アングレスの跡をうけたパスカル・メルシエによってそれぞれ出版準備が進められている。以上の第一次資料が、厳密なテキスト校訂、正確な日付決定、適切な附註を前提として今後順次公刊されるにしたがい、『アンドレ・ジッドと「新フランス評論」初期グループ』においてアングレスが活写した文学環境が、年代的にも広範囲にわたる種々の具体的証言を通じて、さらに詳細かつ多様な全体像をあらわして行くことは間違いない。

さて、シカールの序文は、説得的な論述をもって、ジッドとコポーの半世紀におよぶ交流を「共犯関係」(1903-13年)、「試練の時期」(1913-31年)、「長い老年期」(以後コポーの没する1949年まで)の名の下に三分し、丹念に時間の流れを追っているが、当巻が収めるのは、濃密な友情が支配的な第一期に交された書簡529通である。アングレス前掲書あるいはコポーの『帳簿』(ガリマル出版社「演劇の実践」叢書から全六巻のうち現在までに四巻が刊行)等がもたらした実証的蓄積により、たしかに、これらの書簡に関するかぎり、従来の知見を一新する情報はすでにほとんど残されていないとは言えよう。しかしながら、両文通者の相貌を、時には共振により、あるいはまた対照によって豊かに描き出す細部にはこと欠かないし、我々が立ち会うことを望んでいたのもまさにそれに他ならない。とりわけ、二つの挿話的事実に注目したい。一方は、互いの内的生活に対する真の理解を許す直接的契機として、他方は、両者の演劇観の相

違を象徴的に示すとともに、微妙な陰影を帯びる第二期を予告するものとして、彼らの交流および個々の活動に少なからず影響を及ぼしたと考えられるからである。

第一の事実から確認すると——ジッドと実際に知り合う以前から、自身の「渴き」を代弁する『地の糧』の圧倒的な影響下にあったコポーは、文通が始まった1903年に上梓された『サユール』に対してはとまどいを隠せず、また、ドラマの本質には作者のなにか個人的関心事が投影されているのではないかと推測しながらも、「謎」の解説には遠く至らないでいた。このような彼が、『背徳者』以降の作品に含まれる暗示の意味、そして恐らくは、作家の思想的進展——無制限な生の讃歌から、過度の欲望が招く破局の提示への移行——を初めて正確に理解するのは、ジッドからコリドンの性向を打ち明けられる1905年7月のことである。同性愛的嗜好のないコポーのうちに一時的な動揺をひきおこすこの告白が、しかし、二人の友情に真の深さと広がりを与える機会になったことは想像に難くない。事実、ジッドの『日記』に、それまでは二度短く言及されるだけであったコポーの名前が、親密な記述をともなって頻出し始めるのは、この一件と軌を一にするし、また、日常生活の懊悩の告白がけっして年長作家の側からの一方通行ではなかったことも、約一年半後に、ある女性との恋愛が妻アニエスに発覚した際、コポーがこれを即座にジッドに報告していることから容易に窺われる。

こうした「共犯関係」は、ある時期までのジッドとゲオンとのそれを思い起こさせずにはおかない。友情の急速な緊密化が、同性愛者であるとの告白（ただし、後者との場合は相互的告白）をきっかけにした点や、多くの行動が共有されたという外面的な事情が一致するだけではない。ジッドとゲオンについてすでに指摘されている両者の「役割＝機能の相違」²⁾を、類似した形で、コポーとの関係に認めうるのである。つまり、この場合も、様々な出来事に対する反応を通じて浮かび上がる二人の違いを、基本的には次のように要約することができよう。ジッドにとって常に優先するのは、あくまで、出来事において自分がどうふるまうかであって、彼がそこで味わう運動がやがてエクリチュールを活性化し、他者や事物の把握と同じく、自我の把握を推進する。彼はけっして自己を見失うことはないのである。これに対してコポーの方は、ゲオンとは気質・嗜好等を異にするものの、対象の客観的凝視の探求には向かわず、これと合体することに没頭し、これに吸収され、とりつかれることを選ぶ点で共通する。結果的に見れば、彼の存在は、ジッドにとって、自己と対象の間に立って「合わせ鏡の遊戯」を可能にする第三者として、その自我の客体化に貢献するのである。したがって、すでにプレ＝シュール＝セーヌに引き籠ることが多くなったゲオンに代えて、1905年以降、『法王庁の抜け穴』（1913年完成、翌年出版）まで、ジッドがコポーを、最も注意深く厳しい読者として、自らの創作の現場に立ち会わせたことはけっして偶然とは思われない。他方、自身の性格の特質を有効に利用できず、いまだスタイルを確立していない年少作家の創作活動は、ジッドのそれとの対比において、いっそう悲劇的な様相を呈せざるをえない。雑誌への短い寄稿は少なくないものの、彼が次々に立てる大きな作品の計画は、ジッドの絶え間ない激励にもかかわらず（あるいは、それが幾分余計に禍いして）ことごとく実を結ばない。「エクリチュールは、ジッドにとってプロスペクティブなものであるのに対し、コポーにとってはレトロスペクティブなもの以外ではけっしてない」というシカールの定式化は、以上のような意味で正鵠を射るのである。

コポーは、悪戦苦闘しながらも次第に、自分の特質を総合的に表現できる場は演劇の他にないと考え始め、『新フランス評論』の共同創刊者としての責務を献身的に果たす一方、断続的にはあるが、演劇の実践のための模索を試みる。しかし、それにつれて彼とジッドの間には、それぞれの目指すものの微妙な食い違いが少しずつ現われ始める。ジッドが、旧作『カンドール王』のベルリン公演（1908年）の惨憺たる失敗以後、観客と劇評家に対する態度、ひいては演劇観といったものを大きく変え始め、実際、『オイディプス』（1930年完成、翌年出版）までの二十年以上、劇作から遠ざかったことは周知であるが、このような演劇に対する彼自身の警戒心に加えて、1911年にコポーがジャン・クルエと共同演出した『カラマーゾフの兄弟』に不満を感じてからはなおさら、ジッドは、友の演劇熱が無益な消耗に終り、その創作活動の沈滞にますます拍車をかけるのではないかと危惧するのである。

第二の挿話はこうした事情を背景にもつ。コポーは、かねて抱いていた劇団創設の計画を、シュランベルジェとガストン・ガリマルから資金面の協力をえて、1913年初頭には現実に移し始めていた。しかし、ジッドは、二カ月後の三月初旬まで、これを具体的に知ることがないのである。当書簡集は、その間の細々としたことをすべて伝えているわけではないが、他の資料にも基づいたアングレスの要約（前掲書、第三巻58-63ページ）を合わせ読めば、コポーが計画をジッドに知らせるのを意図的に遅らせたことは疑いを容れない。コポーのとった態度には、いくつかの理由が推測可能であろうが、それまでの数年間の経緯を考慮すれば、シカールの解釈はとりわけ説得力に富む。つまり、知識・経験の両面において啓発されながら、ある意味で絶えず後見人の目を意識せざるをえなかったコポーが、自分の力量を示すためには、この心理的重圧から、不義理を承知で、一時的にでも逃れる必要を感じたのであろう。一件が呼び起こす波紋そのものは、書簡集第一巻の末尾を飾るコポーの長い手紙をきっかけにやがて治まり、ジッドも進んで計画の実現に助力を惜しまないものの、大きな流れのなかで捉えれば、二人の関係がコポーの決定的選択によって新たな方向をたどり始めることは否み難い。続く四半世紀の間は、様々な要因——演劇の実践に対する考え方の差、第一次大戦、ヴィュー・コロンビエ座のアメリカ滞在（そして、結果としてコポーが味わう大きな失望）、ジッドの頻繁な旅行、コポーのカトリシズムへの回心、等々——によって、徐々に疎遠化が進んで行くのである。しかし同時に、表面に現れる様相の推移にもかかわらず、暖かい友情が底流として存続することも、我々はすでに知っている。近刊予定の第二巻は、このように愛着と距離という両義性に綾取られることになる第二期や、晩年の静かな交流についても、引き続き二人の生の声を通して詳しく知る喜びを与えてくれるものと期待される。

なお、ジャン・クロードによる註は、書かれたのは明白だが文通相手が保存しなかったと推定される書簡（特にジッド宛書簡）の遺漏を、コポーの日記を初めとする豊富な未刊文献で補うなど、期待に反せず、一貫して良心的かつ精密である。たしかに誤りや不正確がいくつか見られはするが³⁾、全体の完成度の高さを思えば、これは瑕瑾と呼ぶほどのものでもあるまい。また、少なからぬ数にのぼる、正確な起草日の記述を欠く書簡の日付決定・推定に関しても、現在のところ、とりわけ疑義をはさむべきものを見いだせない⁴⁾。

註

- 1) たとえば、公刊当時大きな反響を読んだゲオン＝ジッド往復書簡集が、遺憾ながら、日付決定（したがって、場合によっては各書簡の配列）に関するかなり大量の、しかもその多くが容易に指摘しうる誤りを犯しており、ピーター・フォーセットが行った修正・提案（voir Peter Fawcett, 《Notes à propos de la Correspondance Ghéon — Gide》, *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 40, octobre 1978, pp. 54-63, et n° 44, octobre 1979, pp. 99-110）の参照・検討が不可欠であるにもかかわらず、研究者が同書簡集の情報にのみ依拠するのをしばしば見るだけになおさらである。
- 2) Voir l'introduction d'Anne-Marie Moulènes et Jean Tipy pour la *Correspondance Henri Ghéon — André Gide*, Gallimard, 1976, pp. 60-6.
- 3) ここでは次の指摘にとどめる。

* 178-9 ページ[1906年5月21日コポー宛]、註3：ジュネーヴのアンドレ博士に受けた診察に関連して、ジッドはこの診察のときに自分の性的傾向を博士に初めて告白し、それを機会に医学的権威の保証をえて、以後、内心の平和とともに、個性の全面的な復聖を手にするとするダニエル・ムートト説への参照を註釈者は求める。しかし、ムートトの言説は、あくまで推測の域を出ず、実証的裏付けを欠く。事実、その後数カ月のジッドの精神状態を考えると、この診察には少なくともムートトの言うような即効性があったとは思われない。また、1894年の第一回目の診察のときにアンドレ博士が

患者の抱える障害の性的要因を見逃したはずはありえないと、精神医学者でもあるジャン・ドレが対立意見を出している以上、これにも言及すべきではなかったか (Voir Jean Delay, *La Jeunesse d'André Gide*, Gallimard, tome II [1957], pp. 333-5)。

* 224ページ[1907年1月20日コポー宛], 註1——「ジッドは、画家モーリス・ドニを同道して、当時マックス・ラインハルトが指揮する「新劇場」での『カンドール王』上演のためにベルリンに赴く。理由は不詳であるが、この上演は行われなかった。」：上演が予定されていたのは、「ドイツ劇場」の指揮に専念するためにラインハルトが1905年8月に弟子のヴィクトーア・バルノウスキーに委ねていた「小劇場」である（「新劇場」は1906年に同劇場に吸収合併され、この時点ですでに存在しない）。バルノウスキーは、同1905年9月、ベルリンの新聞数紙に『カンドール王』の上演権獲得の告示を出していた。上演中止の主な理由は、パリを離れるまえからジッドがそのドイツ語訳に不満を抱いていたフランツ・ブライがベルリンに姿を現さず、呼び出しの手紙・電報にも応じなかったため。結局、「小劇場」での上演は翌1908年1月まで実現されない。なお、ジッドはこのときにもベルリンに行ったと、後にマルセル・シュヴェトゼールに語っているが、明らかな記憶の混同 (Voir Marcelle Schweitzer, *Gide aux oasis*, Éd. de la Francité, 1971, p. 125)。

* 229ページ[1907年6月16日ジッド宛], 註1——「ジッドは二月および三月初めで『放蕩息子の帰宅』を書いた。[……]コポーはマルセル・ドルワンとともに原稿の清書を手伝った。」：『放蕩息子』は、実際には、二月二十日頃には一応完成していた。仏独二カ国語同時出版を執筆中から企てていたジッドは、計画を遅滞なく実行に移すために、ただちに自筆完成原稿（これ自体がほとんど清書に近い）からタイプ原稿を少なくとも三部作らせ、内二部を翻訳のため相前後してドイツに送る一方、一部を用いて、三月初旬にコポー、ドルワンの意見を参考にしながらフランス語原文の見直しをした。しかし、修正は数量ともに僅かであり、かつ大半は純粹に文体上のものである。これらのタイプ原稿の存在は従来知られていなかったが、実は、『放蕩息子』第二版（「オクシダン文庫」、1909年[発売は1910年]）出版のために作成されたと考えられているタイプ原稿（個人蔵）がその一つである。

また、筆者が提供しうる補足的情報としても、以下のものを記すにとどめる。

* 411ページ[1910年11月25日ジッド宛], 註2-3 [トルストイの追悼論文、およびシャルル・サロモンに関連して]：トルストイの生地出奔・死去の四カ月前にあたる1910年7月23日（旧暦7月10日）、サロモン（1936年没）はジッドの依頼に応じて『放蕩息子の帰宅』第二版（前出）をヤースナヤ・ポリャーナに届けた。トルストイは、作品の朗読を聞きながら、その福音書解釈に対する憤慨を隠さなかった。この朗読の様様については、1912年にサロモンから話を聞いたロマン・ロランが簡略な記述を残しているが（邦訳『ロマン・ロラン全集』、みすず書房、第37巻90ページおよび第39巻388-9ページ参照）、サロモン自身のさらに詳しい報告としては、彼が朗読の翌日ジッドに宛てた未刊書簡（ジャック・ドゥーセ文学図書館所蔵、γ 782-1）と、後年、トルストイ「記念全集」の編集者の質問に答えた手紙（Л. Н. Толстой, Полное собрание сочинений, 1928-59, tome LVIII, p. 445, note 991に収録。なお編集者[恐らく、当該巻担当のロジオーノフ]は、この手紙を1910年4月3日付とするが、明らかな誤り。1920年ないし1930年の同月同日の誤植か）がある。

* 685ページ[1912年11月20日頃コポー宛], 註2 [『新フランス評論』へのアンリエット・シャラッソンの原稿持ち込みに関連して]：1909年に『メルキユール・ド・フランス』への寄稿でデビューして以来、多くの雑誌に詩・文学批評を寄せたシャラッソンは、この手紙にも見られるように、ジッドを通じて、たびたび『新フランス評論』に原稿を持ち込もうとしたようである。たとえば、同誌が創刊されて間もない1909年から翌年にかけては、早世したイギリスの詩人アーネスト・ドーソン（現在では、むしろ、オスカー・ワイルドの友人として知られる）の紹介論文をジッドに委ねていた。しかし、ジッドはこの依頼には返答しなかった模様（1910年7月21日付ジッド宛未刊書簡、ジャック・ドゥーセ文学図書館所蔵、γ 203-8参照）。

〈書 評〉

- 4) ただし、クロードが註で引用した資料のなかに、明らかに誤植による日付の誤りが一つ認められる。すなわち、書簡52に関連して部分的に引用されたコポーのゲオン宛書簡(124ページ、註3)が1903年8月4日付とされているが、これは1905年の同月同日と読まれねばならない。付言すれば、註釈者が「未刊」とする当該書簡は、すでにゲオン＝ジッド往復書簡集にその全文が(ただし、日付は明記されずに)収録されている (voir *op. cit.*, pp. 608-9, note 1)。

(北海道大学言語文化部助教授)